

## 摩尼寺「奥の院」発掘調査プロジェクト公開検討会 スケジュール

**第Ⅰ部** 会場：門脇茶屋喫茶部土産物販売エリア

|       |                                                         |
|-------|---------------------------------------------------------|
| 13:00 | ご挨拶                                                     |
| 13:10 | 摩尼寺「奥の院」の発掘調査概要<br>発表：岡垣頼和（鳥取環境大学大学院修士課程）<br>＊パワーポイント使用 |
| 13:30 | 出土遺物の公開と検討                                              |
| 14:00 | 「奥の院」発掘調査現場へ移動                                          |

## 第Ⅱ部 会場：摩尼寺「奥の院」発掘調査現場

|       |          |                       |
|-------|----------|-----------------------|
| 14:30 | 遺構の説明と討議 |                       |
| 15:30 | 下山       |                       |
| 16:00 | 解散       | * 駐車は摩尼寺の駐車場をご利用ください。 |

この夏休みから十年ぶりに発掘調査を経験し、その結末を迎えぬまま、すでに3ヶ月もの時間が過ぎようとしている。あの、日本中を滅入らせた猛夏の日々の反動なのか、山陰地方は例年よりひと月早く冬を迎えた。十月下旬には大山や氷ノ山で初冠雪を記録し、わたしたちが足を運ぶ摩尼山でも、雪こそ降りはないが、毎日どんよりした空から冷たい雨粒が落ちてくる。

摩尼寺「奥の院」－わたしたちの発掘調査のフィールドである。熱帯のような夏の暑さと初冬のような秋の長雨に苦しみながらも、この3ヶ月間、寸暇を惜しんで、標高300メートルの現場に学生たちと登り続けている。

山陰地方の山嶺には、岩窟や絶壁と複合した「懸造（かけづくり）」の仏堂が少なくない。懸造とは、ありていに言うならば、山の斜面にたつ半高床式の建築である。斜面との接点では地面をほとんどそのまま床とするが、斜面からせり出す部分では宙に浮いた高床になる。全国的に有名な例の一つあげるとすれば、京都の清水寺本堂になるだろう。清水寺本堂の場合、崖上の床面がひろくせり出して舞台のようになり、その様式を「舞台造」とも呼ぶ。「清水の舞台から飛び降りて」というお馴染みの科白の「舞台」とはここから来ているのである。鳥取県三朝町の三仏寺投入堂（国宝／平安後期）は、平安密教建築の数少ない遺構であり、年代の古さも手伝って、清水寺本堂と並ぶ懸造建築の双壁としてしばしば引用される。しかし、投入堂の場合、だれがどうみても「舞台造」という用語に似つかわしくない。それは、絶壁を構成する玄武岩層と凝灰岩層の接点に生まれた岩陰のくぼみに立つ小さな懸造の仏堂である。規模は小さいながらも、そのアクロバティックな立地にだれもが驚かされ、圧倒される。そこには「靈験」と呼ぶべき超俗性が、溢れんばかりに発露している。

絶壁にたつ懸造の密教系仏堂は全国的に分布している（井口一幸『古代山人の興亡―懸け造り堂宇の謎』1991、続『古代山人の興亡―懸け造り寺社巡礼 西日本編』1996）。ところが山陰地方では、鳥取県若桜町の不動院岩屋堂、島根県出雲市の鰐淵寺蔵王堂、隠岐島前の焼火神社（旧真言寺院）など、崖に穿った岩窟と複合した懸造が点在している。上記諸寺の多くは、8世紀以前の雑密（初期修験道）の時代に開山し、平安時代に純密の寺院として再興されたという二重構造の縁起をもち、前者は「奥の院」、後者は「根本堂（本堂）」を中核とする空間領域に境内を二分する傾向がみとめられる。その「奥の院」の風景に、われわれは顕著な霊験を感知するのである。

しかしながら、懸造という建築物に霊験があるわけではない。絶壁、岩陰、岩窟、滝、巨石などの「場所」もしくは「自然物」にこそ霊験があり、そこに脇役としての建築物を加えることによって、場所の超俗性が増している。三仏寺投入堂と同等、あるいはそれを凌ぐほどの霊験を発露させているのが、出雲市平田の鰐淵寺浮浪滝・蔵王堂である。絶壁の小さな岩窟が懸造の蔵王堂を銜え込むようにしてあり、蔵王堂の正面に滝が落ちている。落水でえぐられた滝壺には「誤って滝壺に落とした碗の仏器を鰐魚（わに）が鰓（えら）にかけ浮かび上がった」という伝承があり、それが鰐淵寺なる寺号の由緒であるという。その仏器を落としたのが信州より来山した智春上人であり、寺伝によれば、推古2年（594）、上人が推古天皇の眼疾を浮浪滝で祈って平癒された報償として建立された勅願寺であるともいう。

二重構造の縁起とそれともなう境内のゾーニングなどからみて、「奥の院」が8世紀以前にさかのぼる初期修験道の行場であるとの見方が十分可能なわけだが、それを裏付ける確実な証拠がないのもまた事実である。こうなると、どうしても「奥の院」の考古学的研究が必要なのであるが、残念ながら、まったく進展の気配をみせていない。だからわたしは、職場に近い鳥取市の摩尼寺「奥の院」の発掘調査に着手した。そこには、石塔や石仏・木彫仏を納める小さな岩窟と大きな岩陰が二層になって穿たれ、その正面の加工段（斜面を掘削・整地して形成した平坦地）の地表面にたくさんの礎石が顔を出している。岩窟・岩陰仏堂の正面に懸造の建物がたっていたのは間違いない、という認識のもとに縄張りし、鍬入れしたのが8月の初めであり、わずか200m余りの現場が3ヶ月経った今もまだ終わらないのである。

余談ながら、岩窟と複合した懸造の仏堂を、わたしは古代中国の石窟寺院がミニチュア化したものだという見通しをもっている。中国の石窟寺院は、石窟の正面に木造の礼堂をもっていたり（雲崗など）、石窟の保護施設として木造の窟檐を備えるもの（麦積山、敦煌莫高窟など）などがあり、そのような構造が圧縮化されながら、朝鮮半島を経由して日本に入ってきたのではないかと、思っているのである。さらに告白するならば、摩尼寺「奥の院」の発掘調査成果と復元研究、さらには中国・朝鮮半島との系譜論的比較研究を本書の中核に据えようと当初は構想していた。しかし、肝心の発掘調査が遅れに遅れてしまい、出版に間にあわなくなったため、断腸の想いで割愛することを決断した。